

新時代の幕開け

事務局長 小林二三男

プロ野球70周年を迎えた昨年、春先からは各地で70周年を記念する展示会の開催や多くの出版物が刊行されました。3月末にはニューヨーク・ヤンキースVSタンパベイ・デビルレイズのMLB開幕戦が東京ドームで開催され大変な盛り上がりを見せてシーズンインとなりました。8月のアテネ五輪での銅メダル獲得、パ・リーグの新しい試みであるポストシーズンのプレーオフにおける予想を遙かに超える盛り上がり、2年連続で第7戦までもつれ込んだ日本シリーズの大激戦など、白熱した試合の数々に興奮を覚えました。

その反面、近鉄とオリックスの統合問題に端を発した球界再編問題が沸き起こり、プロ野球70年の歴史の中で初めてというストライキが9月18日(土)、19日(日)に2日間行われ12試合が中止となる事態になりました。その後、日本野球機構と選手会の話し合いから新球団の参入が認められ「東北楽天ゴールデンイーグルス」が誕生、「セ・パ交流試合」も今シーズンから5月と6月に行われるようになりました。

いよいよ「新球団誕生」に「交流試合」と何かと話題も多く、期待のふくらむプロ野球新時代の幕が開きます。博物館も、新しいシーズンに向けて外も内も大きく変わります。入口前には「力強さと情熱」を表現したウエルカムゲートが存在感を示し、入口にはエレベーターを設置しました。エレベーターの内外にも入口から続くデザインが施され、展示に対する期待感が大きくふくらみます。

プロ野球Todayコーナーには新球団「東北楽天ゴールデンイーグルス」、統合球団「オリックス・バファローズ」、球団名変更「福岡ソフトバンクホークス」の3球団の新しいユニホームや用具などがお目見えしています。アマチュアコーナーは、高校・大学・社会人・軟式野球それぞれの歴史を最新情報まで織り込んだ年表に更新しました。各大会の優勝チームの写真やユニホームも新たに展示してあります。又、広くなった壁面ガラスケースには、タイムリーで話題性のある展示を提供してまいります。

今年の博物館は「楽しく遊べて」、「分かりやすく」、そして「ちょっと学べる」をモットーに企画展やイベントに取り組んでまいりますので、内外ともに新しくなった博物館に是非お立ち寄り下さい。



改装前の入口



新しくなった「ウエルカムゲート」



アップグレードしました!

エレベーター

ウエルカムゲートと統一されたデザイン。中に入ると…。



東北楽天ゴールデンイーグルス

球団と選手よりご寄贈いただいた磯部公一選手ユニホーム、バット、スパイク、飯田哲也選手バット、一場靖弘投手グラブ、スパイク、中村武志選手キャッチャーミット、大島公一選手グラブ、山崎武司選手ファーストミットを展示中です。



アマチュアコーナー

平成11年と15年の改修工事で展示スペースを拡充して以来、内容の充実をはかっているアマチュアコーナーですが、この度、各団体の年表と主要大会決勝スコアのパネルを更新しました。今回、パネルを可動式にしたことで、高校野球の時期には高校野球、都市対抗の時期には社会人関連資料を多く展示できるよう、フレキシブルにリニューアルしました。今後も引き続き、シアター裏側壁面の展示利用などアマチュアコーナーの充実をはかっていきます。

球団変遷図

従来よりも見やすく、最新情報も盛りこみました。A3サイズにしたものを図書室にて100円で販売中です。



野球場コーナー

科学のコーナーに続いて、野球場コーナーもイベントホールに移設。新球場の情報も展示中です。





殿堂入りの人々を語る(8)

父・中野老鐵山の思い出 中野 吉郎

(中野武二氏 長男「ミュージアム図書」社長)



1972年殿堂入り
中野武二氏レリーフ

バッティングの極意は「目」。両目の真ん中にボールを呼び込め。すると、どんなスピードボールも止まって見えるから、それを打てばいいんだ。君たちは満月が円でなく、球体に見えたことがあるか…と、父は後輩や私によく云っていた。一高の名セカンド中野武二(綽名は老鐵山)は明治38年、太鼓の撥を口にくわえて毬を乗せる曲芸師の動きからこの極意を学んだという。今でいえば「動体視力」ということか。

打撃の神様、川上哲治氏が「球が止まって見える」と云ったことがあり、父もあんなに打ったのかと記録を調べたが、打率はもうわからない。足が早かったようで三塁打が多い。現役時代の全試合ノーエラー(老鐵山の要塞のように難攻不落)というのは事実らしい。明治20年ごろから、一高が日本で一番強い野球チームだった。中野は高師付属中から

野球を始め、あこがれの一高野球部に入り、日露戦争の頃にはキャプテンになる。が、なった年にライバル慶応や、出来たばかりの早稲田野球部に破れ、学習院にまで負けてしまう。一高野球の伝説に泥をぬったという口惜しさが、彼の人生の出発点だった。

勝つまで落第して一高に留まるというのを、親に諭されて本郷帝大に進学するが、教室には出ず、近くの一高グラウンドに毎日通う。覇権奪回を心に誓い、野球部コーチ(今日の監督)として。だがどうしても早慶に勝てない。ある年は慶応に勝つが早稲田に負け、早稲田に勝つ年は慶応に負けるという歳月が16年も続く。やっと大正7年、名投手内村祐之を得て、早、慶と三高に連勝し宿願を果たすのである。

この16年間に、父はまたアンパイアとしての技量を買われた。その頃はいわゆる「早慶戦時代」(六大學リーグは大正14年から)。まだ、審判の「エコヒイキ」を疑う応援団が暴れたりして、しばしば試合が中断、中止された。そんなとき、絶対公正、大声の権威ある審判として、早慶両校からいつも指名されたのが、中野老鐵山だったという。

「野球殿堂入り」に値する功労があるとすれば、父の臥薪嘗胆、この16年にあったに違いない。時に中野武二、37歳。悲願を果たすと結婚して野球から離れる。が、普通のサラリーマンにはなれない。後半生も本業(電灯会社からガス、コークスの会社へ)はそっちのけで、「修行」に明け暮れるのである。

まず、ゴルフに熱中する。早朝出勤の前に9ホール、帰宅途中に寄って9ホール、日曜はまる一日で2ラウンド(いい時代でしたね)、保土ヶ谷と駒沢で毎週13回通って合計8ラウンドという猛練習を重ねて、摂政杯コンペに優勝する。これこそ「止まった球を打つ」だけなのだが、どうやら天才型ではなく努力型だったようで、真っ黒に日焼けはしたが、シングル(駒沢で9)になるまで8年もかかった。

手術(眼底腫瘍)してからゴルフをやめ、今度は「書」を始める。誰かに、祖父(老鐵山の父)中野武宮翁(商業会議所会頭)は字が巧かったのに、といわれて一念発起したらしい。これにも「千本ノック」に似た、恐ろしい記録がある。半紙に4字3行計12字、大きな楷書で毎日50枚くらい墨書する、半紙の束を積み上げ、枚数を足し算、字数を掛け算するのが楽しみ。紙クズを捨ててはならぬというので母は嘆いていた。

「書」にも一言あった。「書もまた、タイミングである」と。王羲之や顔真卿などを手本に、何本か筆がすり切れ、42万3千何百字かまでいった時「書」は終わった。昭和17年(58歳)、工業倶楽部で大声で友人と話をしているとき、脳溢血に襲われ、右半身不随となるのである。

50歳を過ぎて酒量が増えた。一高同窓の安倍能成や末弘巖太郎など学者連と飲んで議論し、財界人とは自慢の大声で長唄をうたい、学生時代「蝙蝠安」を自ら演じたほどの歌舞伎好きが、6代目菊五郎の芸に惚れて、名優相手に毎夜の酒盛り。酒は「酔心」、好物は牛肉のバター焼き、行きつけは京橋「天満壽」、五尺四寸、21貫(160cm×80kg)の太鼓腹はもうコレステロールだらけだったろう。

まさに倒れて後己む、父のこの気合と根性は一高野球で鍛えられたものだ。しかし頑固とはほど遠く、真っ黒な顔(「黒面会」会長)で目を輝かせての話には、アイデアいっぱい、明るいユーモアがあり、人を惹きつけた。「一高の精神野球」とよくいうが、父の話は「野球道」だけでなく野球術、野球戦略に及んでいる。

「ゴロは前で、ボールの下半分をみて捕れ」「カーブは手の指でなく、きき足の親指でかけろ」「1点差負けは善戦でなく最悪戦」「1試合に勝てるチャンスは3度ある」など、いわゆる「中野セオリー」の中で、あまり知られていない「聞き書き」を付記しておこう。

ひとつは審判への苦言で、「球審はボールがミットに収まる直前の一瞬の静寂に、大声でコールせよ」。もうひとつは、守備コーチへの提言で「ノックはボールを左手、バットを右手で片手打ちせよ。試合で逆モーションする野手がいたらそれはノッカーの責任」というこの2つの提言、老鐵山以後100年の野球界で実行した人はひとりもないようだ。

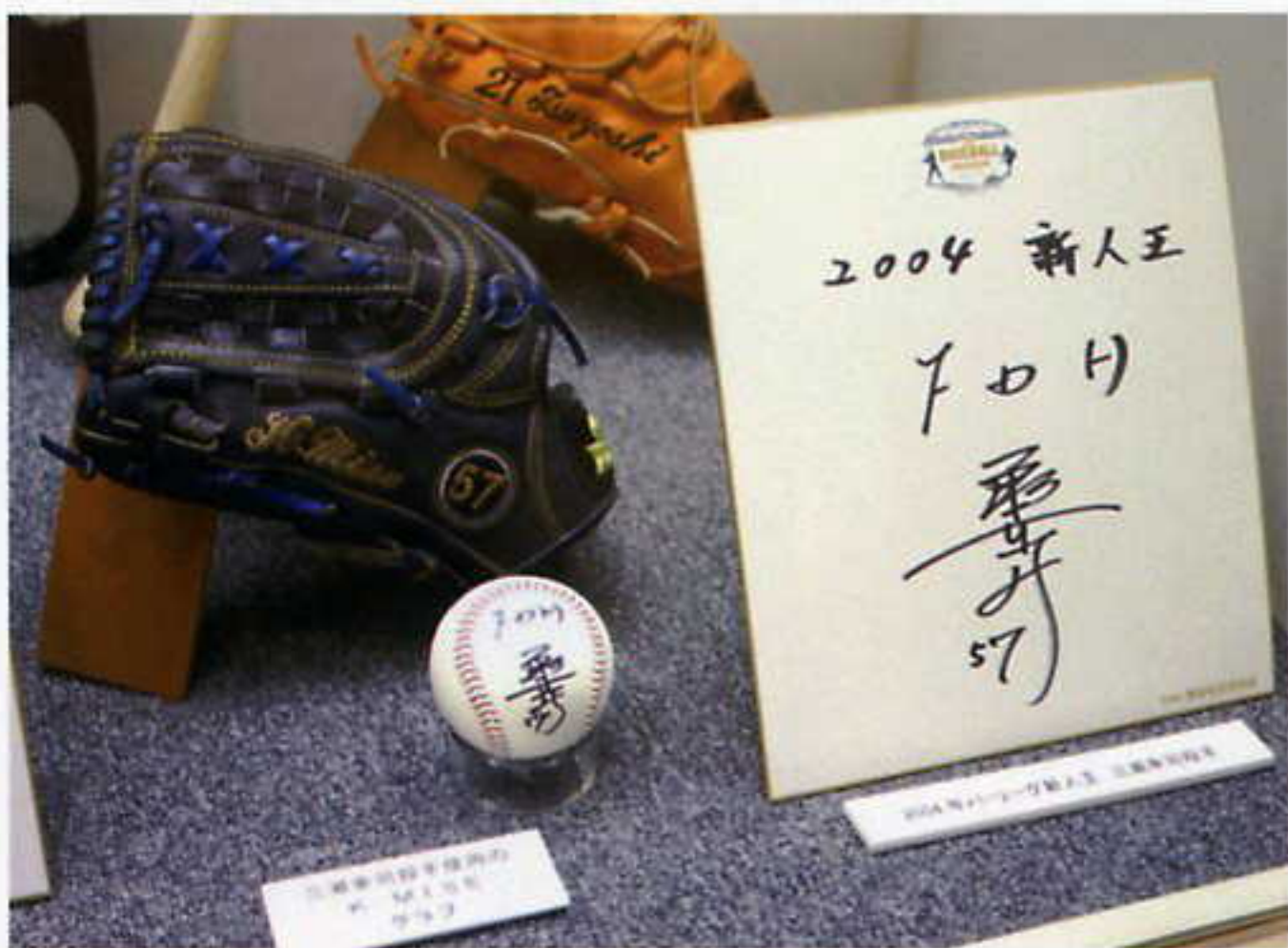
最後に息子に遺したキツイひとつ。それは、父の死(脳溢血再発)の1年前、戦後初の東大入試に私が合格した時のことである。母と手に手を取って喜ぶのを見た父は、ニコッと笑って、「まあよかったが、大學へ入ったぐらいで、そんなに喜ぶようじゃ、たいしたものにはならないな」と云ったのである。あれは初戦に勝ったぐらいで喜ぶな、ということか。覇権奪回の誓いを立てた当時の自分を思いだしたのだったか。たしかに息子はたいしたものにはならなかったが、戦前のインターハイで下手なショートをやってから80歳の今日まで(父より16歳長生き)、「野球好き」だけはしっかり相続いたしております。



知ってほしいこんな資料(51)

新人王のグラブ

当館の常設展示「プロ野球Today」コーナーでは、毎年開幕にあわせて、前年活躍した選手のバットやグラブ、スパイクなどを各球団と選手ご本人のご協力でご寄贈いただき、展示に追加しています。なかでも近年は前年新人王を獲得した選手の用具は必ず依頼しており、今年も三瀬幸司投手（ソフトバンク）、川島 亮投手（ヤクルト）から、かなり使い込まれたグラブをご寄贈いただきました。選手自身がゲームで使って、汗が染み込んだ用具であり、ファンの方たちに大変ご好評です。



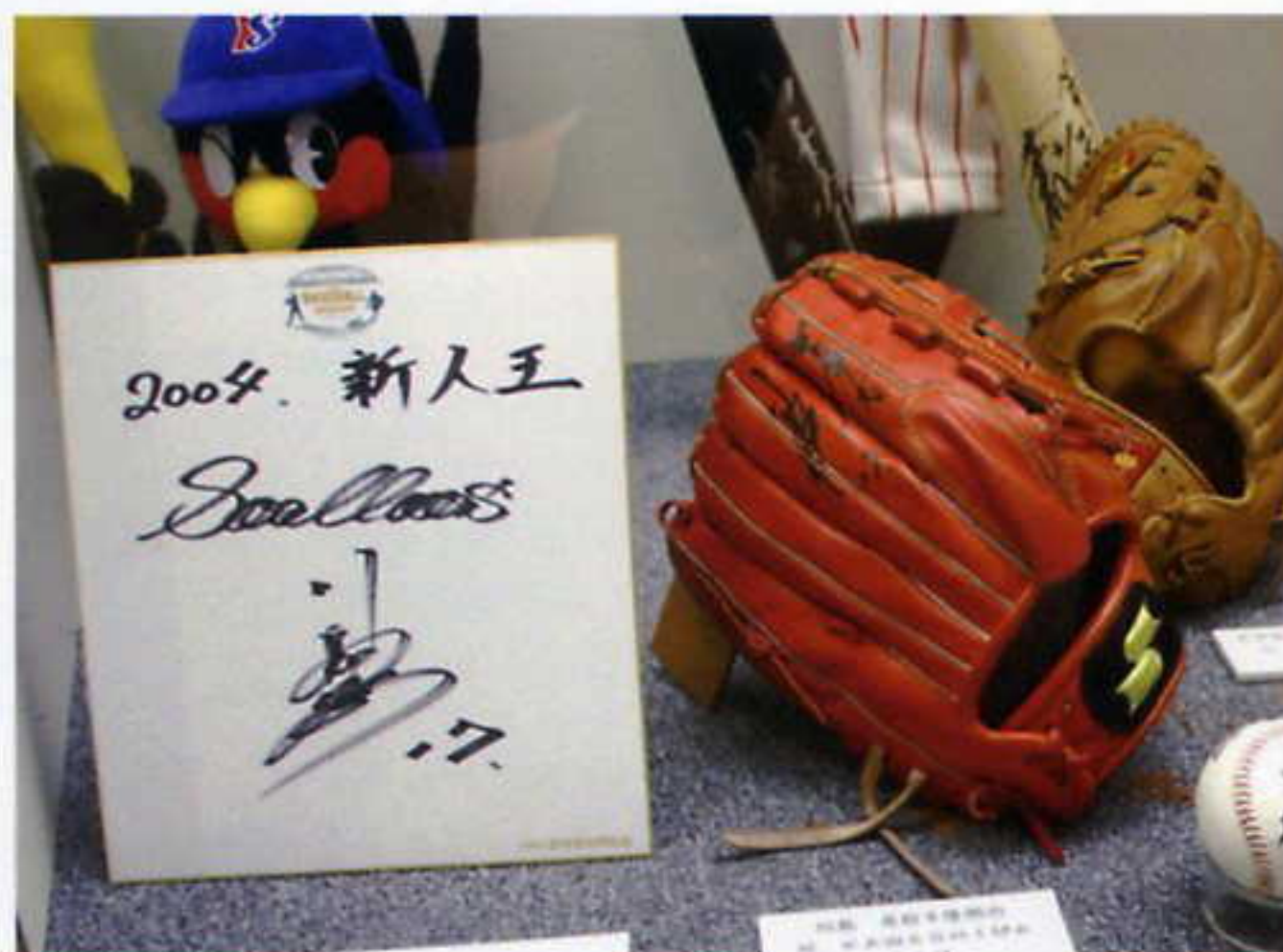
三瀬幸司投手グラブ（ソフトバンクコーナー）

三瀬幸司投手は入団1年目の昨年、32セーブポイントをあげ最優秀救援のタイトルを獲得、パ・リーグ史上最年長（28歳7ヶ月）の新人王に選ばれました。一方、川島 亮投手も入団1年目で10勝をあげ、リーグ3位の防御率3.17の好成績で新人王に選ばれました。両投手のグラブはSSK社製で、ともに約580g、サイズもほぼ同じで内野手用のように小さめのサイズです。

毎年このようにして展示内容を充実させているわけですが、引退や移籍などがあると、その選手の用具は球団コーナーからは下げ、博物館資料として永久に保存し、常設展の歴史コーナーや企画展で展示をしたり、他館の展覧会に貸出したりして有効に活用しています。

5月9日まで大阪歴史博物館で開催中の「ファンと歩んだ70年 阪神タイガース展」に貸出中の和田豊選手のスパイク（92年寄贈）や新庄剛志選手のバット（93年寄贈）などは、「プロ野球Today」の展示のために阪神球団からいただいた資料です。こうして毎年ご寄贈いただいた資料が蓄積されて、10年後、20年後により充実した展示や研究等の博物館活動ができるようになります。

前頁でもご紹介したとおり、今季は新球団楽天イーグルスコーナーの新設もあり、たくさんの資料を新たに収集して展示中です。三瀬投手、川島投手のグラブもそれぞれソフトバンクコーナー、ヤクルトコーナーで展示中ですので、ぜひご覧ください。



川島 亮投手グラブ（ヤクルトコーナー）

学芸員 関口 貴広

企画展『プロ野球の記録展』

会期 開催中 平成17年7月11日(月)まで
会場 多目的ホール

“野球は記録のスポーツ”といわれるほど、様々な数字で語られることの多いスポーツです。今回の企画展では、日本プロ野球が1936年から積み重ねてきた様々な記録とそのランキングを紹介し、大記録を達成した選手の用具や記念品を展示中です。また、打率や防御率などの計算方法や記録関連の図書やウェブサイトの使い方など、お役立ち情報もわかりやすく紹介しています。



王貞治選手
756号ホームランボール、
800号のホームランバット

イチロー選手
オリックス・ブルーウェーブ
ユニホーム





コラム／博覧・博楽 (14)



アメリカ野球殿堂の楽しさ・上

松原 明 (野球体育博物館 維持会員)

私は名古屋で発行している月刊誌「月刊ドラゴンズ」にアメリカの野球殿堂巡りを連載。もう、70回を超えた。全米各地にある、大小様々の博物館は、アメリカ野球の奥深い歴史を物語る文化遺産。現在も各地のファンの中に愛されている。祖父から父へ、子供、孫へと受け継がれてきた。「先輩たちは、このような功績を残して、野球を広めてきた。野球こそ、アメリカの国技なのだ」と、教えている。

これらの関係者は、博物館をとっても大事にしてきた。国民的スポーツ、その偉大な遺産を保管し、惜しげもなく公開して、ファンとともに、楽しんでいる姿をどこに行っても目撃することができた。それは、まさに、感動する体験だった。

大リーグ試合を観戦に行けば、ホーム球場に併設されている博物館を見学できる。全30球団でこの種の展示がない球場はなかった。日本では、博物館、殿堂が設けられている野球場は東京ドームがあるが、ごく自然に、展示室が設けられている大リーグ球場を見ると「あの選手はこうだったのか」と、チームの伝統がすぐに理解できるのが本当に素晴らしい。チームの歴史を研究することこそ、大リーグを知る第一歩なのではあるまいか。

例えば、ボルチモア・オリオールズのホーム球場「カムデン・ヤード」では、外野観覧席のセンター後方客席裏に「ウォール・オブ・フェイム」の歴代スター額が掲げられている。ファンはグッズや、飲み物、食事を買って、ここを眺めてから自分の席に座る。これでいい、と思う。同じ趣向は、フィラデルフィア・フィリーズの新球場「シティズンズ・バンク・パーク」も全く同じ趣向。ここは額の他に、写真と歴史イラストの展示も壁に貼られ、さらにチームの姿を伝えるように工夫されていた。場内壁画には、殿堂入りしている選手たちの油絵「クーパースタウン・ギャラリー」が展示されている。歴史写真、使っていたグッズなども、その前のガラスケースに収められていた。眺めるファンは後を絶たない。

野球場の博物館は多種多彩。グッズ・ショップと同居しているのは、クリーブランドの「ジェイコブズ・フィールド」。ここはショップ隣の展示室。シカゴ・ホワイトソックスの「USセルラー・フィールド」は全くショップと同居。いつもファンで混雑している中、展示を眺めながらグッズを買うのも面白い。

球場コンコースの中心広場にガラスケースを壁に立てて、大先輩たちの業績を表示しているのは、カンザスシティの「カウフマン・スタジアム」。オークランドの「マカフィー・コロシウム」も同じ。テキサスの「アメリカエスト・フィールド」は、場内正面入り口近くに、立派な2階構造の博物館が独立して設けられている。「野球の歴史を青少年に伝える教育センターにしたい」と学習ツアーも常時行っている。

ツインズの「メトロ・ドーム」は正面コンコースに、歴史写真、グッズが壁面展示。デトロイトの「コメリカ・パーク」は1階の広い通路に天井から年代別の垂れ幕が下がり、その下に、写真、記念品を置いた。この通路を一周すれば、タイガースの栄光の歴史をつかめる仕掛けだ。

最古の歴史を誇る、ボストンの「フェンウェイ・パーク」には、やっとな場内の一室を整備して、クーパースタウンと全く同じ形式の殿堂入り記念額をズラリと飾る「ボストン殿堂」を公開した。

何と言っても、球場の聖地は、ヤンキー・スタジアムの「モニュメント・パーク」。センター後方の広場に歴代勇者の記念額が並べられ、ツアー・コースにも組み入れられている。ルース、ゲーリック、ディマジオら、大リーグの歴史に残る人物を仰げば「ヤンキースは素晴らしい」と、感激しない人はいない。ピジターの選手も、ここを訪ねて新たなスタートの誓いを心に刻む。だれも大リーグ100年余りの伝統の重みを感じるはずだ。

(次回は各地の地域、個人博物館の特色を紹介します。)



こんにちは図書室です



野球シーズンが始まる頃に、主に前年度の記録が載っている野球の年鑑が発行されます。プロ野球の『オフィシャル・ベースボール・ガイド』（日本野球機構編 1963年～現在）。大学野球では『野球年鑑』（東京六大学野球連盟発行 昭和12・13年、昭和21年～現在）。大リーグは『Baseball Guide』（The Sporting News社発行 1944年～現在）。韓国は『韓国プロ野球年鑑』（韓国野球委員会発行 1983年～現在）。台湾は『中華職棒記録年鑑』（中華職棒連盟競技組発行 1993年～現在）などを毎年収集しています。

このような年鑑は古くからありました。そこで今回は、当館で所蔵している明治・大正・昭和の野球年鑑をご紹介します。これらの本は、情報が少ない明治、大正時代の野球の記録や出来事について調べる時に便利ですので、古い記録探しにご利用下さい。

● 『野球年報』（当館では、明治35～38年、40年～45年、大正2年～4年所蔵）

伊東卓夫発行。伊東氏は、東京・本郷にあった運動具店、美満津商店主。明治35年版の発行の辞には、アメリカには野球の新聞、雑誌や記録を載せた年報があり、豊富な情報に比べ、日本には1種類の野球雑誌があるだけなので、記録を載せた年報を発行することにしましたとあります。外国人チームとの試合結果、東海や関西など地方での野球試合についても書かれていて、野球規則、選手などの写真も多く載っています。

● 『野球年鑑』（当館では、大正5年～7年 所蔵）

（復刻版：大正5年～7年 所蔵）

朝日新聞社発行。朝日新聞社が野球を奨励する目的で発行しています。また、4月1日から1年間の記事を収録すると書かれています。この年は野球に関する記事だけですが、大正6年より、運動競技全般をのせています。

● 『運動年鑑』（当館では、大正8年～昭和18年、昭和23年～28年所蔵）

（復刻版：大正8年～昭和18年、昭和23年～28年所蔵）

『野球年鑑』を改題したもの。

● 『アサヒスポーツ年鑑』（当館では、昭和29年～33年 所蔵）

『運動年鑑』を改題したもの。B5版と大型になり、グラビア写真が多く載っています。

● 『Spalding's Baseball Guide』

（当館では、1903年～1939年所蔵。＜1910年、1913年、1914年所蔵なし＞）

（復刻版：1876年～1905年を所蔵（※1876年、1877年は『Constitution and Playing Rules of the National League or Professional Base Ball Clubs』））

アメリカの運動具会社、スポルディング社が発行。プロ野球の歴史、記録、規則などのほか、メンバーなどの写真が多く掲載されています。また、巻末にはスポルディング社の商品カタログが掲載されており、用具の変遷を知る上で貴重な資料となっています。

● 『The Reach Official American League Base Ball Guide』

（当館では、1905年～1939年所蔵。＜1907年、1938年所蔵なし＞）

（復刻版：1883年～1905年を所蔵）

アメリカの運動具会社、リーチ社が発行。アメリカン・リーグの公式ガイドブックとして発行していました。アメリカン・リーグの記録以外にもナショナル・リーグやその他の野球の記録なども掲載されています。巻末にはリーチ社の商品カタログが掲載されています。

司書 山根 礼子



【2005年度の維持会員を募集しています】

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万点を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

会員の特典

- ・当博物館発行「ニュースレター」(季刊)送付します。
- ・何度でも無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
- ・会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
- ・イベント情報などを優先的にご案内します。
- *新会員には上記の特典のほか「The Baseball Hall of Fame & Museum 2002 ~人で振り返る野球ハンドブック~」を進呈します。

会員の種類と会費

年会費(4月~翌年3月迄)
 法人 1口 10万円 個人 1口 1万円
 ご入会月により、初年度年会費の割引があります。

| ご入会月 | 4月~9月 | 10月~12月 | 1月~3月 |
|------------|---------|---------|--------|
| 維持会費(個人会員) | 10,000円 | 5,000円 | 2,000円 |

ご入会の方法

- ①館内にあります「維持会員募集のご案内」の「入会申込書」に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、博物館までご連絡ください。
- ②「入会申込書」が届きしだい「維持会費のご請求書」をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ

博物館 業務部 高城・竹内
 皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。

博物館からのお知らせ

【販売中!!】

「かっとばし」

折れたバットのリサイクル商品「かっとばし」を、当館で販売しています。この箸は野球殿堂(Hall of Fame)のロゴが入った博物館オリジナル商品です。

価格は1膳、大(男性用:写真参照)・中(女性用)が1,890円、小(子供用)が1,575円です。(価格は税込み。また東北楽天ゴールデンイーグルス、福岡ソフトバンク、オリックス・バファローズをはじめ12球団ロゴマーク入りの箸も販売しています。)

オリジナル箸の仕様(写真参照)

- ・長さ:23.5cm
- ・重さ:15g
- ・材質:アオダモ(折れたバット)



「プロ野球公認球」

コミッショナー事務局(NPB)では、日本野球独特の「反発テスト」をしています。

超高速マシンから打ち出したボールを鉄板にぶつけ、ぶつかる前の速度と跳ね返りの速度を計り、その比(反発係数)を出して、一定範囲に納まるものを「合格」としています。マシンと運動のパソコンで計測されますが、専門的にいいますと「秒速75メートル(時速270キロ)のところでは反発係数0.41~0.44の範囲に入ると合格」となります。この基準を上回ると「飛ぶボール」で不合格、下回ると「飛ばないボール」でやはり不合格です。合格したボールに「試合に使ってよろしい」との合格印「APPROVED BY COMMISSIONER NPB」が押されます。このコミッショナー印の押された試合球は、一般には販売していません。それほど「貴重」なのです。



- *当博物館の受付にて、1個1,600円(税込)で販売しています。
- *郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金(公認球代+梱包送料)を現金書留で当博物館までご送付下さい。
- ・公認球 1個 1,600円
- ・梱包送料 1個 250円、2~3個 400円

※4個以上お求めの方は、当博物館(TEL 03-3811-3600)までお問合せ下さい

【理事・評議員の交代】

~新任~

- 理事:宮内 義彦氏(オリックス野球クラブ代表取締役オーナー)
 手塚 昌利氏(阪神タイガース取締役会長オーナー)
 松田 昌士氏(日本野球連盟会長)
- 評議員:黒岩 彰氏(西武ライオンズ取締役球団代表)
 角田 雅司氏(福岡ソフトバンクホークス取締役球団代表)
 野崎 勝義氏(阪神タイガース取締役連盟担当)
 田中 浩氏(横浜ベイスターズ常務取締役連盟担当)
 井上 智治氏(楽天野球団取締役連盟担当)
 前川 芳男氏(パシフィック野球連盟審判部長)

~退任~

- 理事:堤 義明氏、田代 和氏、久万俊二郎氏、山本英一郎氏
 評議員:星野 好男氏、佐藤 賢二氏、牧田 俊洋氏、山中 正竹氏、永見 武司氏

●博物館のご案内

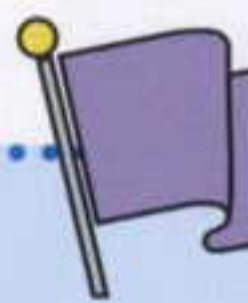
- 場所 東京ドーム21ゲート右
 開館時間 3月1日~9月30日 AM10時~PM6時
 10月1日~2月末日 AM10時~PM5時
 *入館は閉館の30分前まで
- 入館料 大人 400円(300円) 小・中学生 200円(150円)
 ()は20名以上の団体
- 休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
 年末年始(12月29日~1月1日)
- 【5月・6月・7月の休館日】
 5月 2日・9日・16日・23日・30日
 6月 6日・13日・20日・27日
 *6月28日~9月4日まで無休です。

●編集後記 新しいシーズンが始まりました。それと同時に博物館もエレベーターの設置、ウエルカムゲート、展示物の更新などいろいろと新しく変わりました。ぜひ見にいって下さい。次号は、7月22日に行われます殿堂入り表彰式の速報となるため、発行が少し遅くなりますので、ご了承下さい。

Newsletter Vol.15 / No.1

2005年4月25日発行
 編集・発行 財団法人 野球体育博物館
 〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61
 Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369
<http://www.baseball-museum.or.jp/>
 定価 100円

The Baseball Museum



リレー随筆(20)

競技者表彰委員会幹事 道谷 眞平 (NHK大阪放送局)

NHK大阪放送局で仕事する私たちにとって、本格的な野球シーズンの始まりは、センバツ高校野球です。プロ野球のオープン戦が佳境に入る頃、出場校の甲子園練習が行われます。コートの際を立てたくなるような風の中で、ネット裏から高校球児の練習を見ていると、「ああ、今年も野球が始まるな」と実感するわけです。

全国から集まった出場校の練習は50分間。シートノックから練習を始めるチーム、いきなり紅白戦を始めるチーム、ホームプレートで校歌斉唱するチーム…練習の内容を取材することはそれぞれのチームの個性がわかって、毎年の楽しみでもあります。今年72年ぶり出場の高松高校は、いきなり全員がファールグラウンドでヘッドスライディングを始め、見ているほうは思わず拍手してしまいました。

バッティング練習を見ていて思うのは、私たちの世代の高校球児の定型だった、スタンスを広く取ってバットを寝かせて担いで構え、ボールに当てに行く選手は一人もいないことです。テレビに映る中村紀洋選手をお手本に、足を大きく上げてフルスイングする主軸バッターもいる一方で、小柄なバッターも工夫しながら、ボールを叩いて強い打球を放つ練習をしてきたことがよくわかります。金属バットの進化もあるけれど、理にかなって、その上でそれぞれの個性にあった打ち方を指導することが今やあたりまえのことになっているのでしょう。

指導者もこれまで以上に個性的な監督が活躍しました。アトランタ五輪のソフトボールのヘッドコーチから転身された長沢宏行さんは、創部2年の神村学園を率いて決勝戦まで勝ちあがりました。決勝を前にしたインタビューで「ソフト流の面白いバント守備をお見せしますよ」といってニッと微笑まれたときはドキドキしてしまいました。練習場所も道具も不足する中で、相手に応じた戦略で実戦に強いチームを育てました。山形県勢として初めてベスト4に進んだ羽黒高校は、アメリカ育ちで大リーガーを目指した横田謙人さんが監督でした。フライを捕球する時の野手同士の声の掛け合いも「I can!」のアメリカンスタイル。勝利監督インタビューを担当した仲間のアナウンサーは「It's like a dreams!」の第一声に一瞬絶句しました。

改革の年といわれる野球界ですが、野球の第一の魅力は、チームや選手の個性だということが、センバツを実況しての改めての感想です。私がセンバツに集まった若いアナウンサーにアドバイスしたのも「個性を伝えよう」ということです。殿堂入りアナウンサーの志村正順さんは、プロ野球黎明期「沢村、左足を靴底のスパイクがはっきり見えるほど高々と上げました」と実況して、近くの観客から「そのとおり!」と声がかかったといいます。インターネットを開けばゲームの途中経過は正確に判ります。でも、野球ファンの興味と共感を引き出すには、勝った、負けた、の行間にある人間の個性のドラマを、現場に一番近い人間である私たちが個性的に伝えることが必要だと思っています。

…ということを肝に銘じつつ、一人のプロ野球ファンとしては、個性的な試合、個性的なプレーがたくさん見られる改革元年であることを願っています。